

植民地朝鮮における愛国婦人会  
—韓国併合から満州事変開始まで—

広瀬 玲子

北海道情報大学

Aikokufujinkai in the colonial Korea  
—from annexation of Korea to the beginning of Manchurian Incident—

Reiko HIROSE

Hokkaido Information University

平成28年11月

北海道情報大学紀要 第28巻 第1号別刷

## 〈論 文〉

## 植民地朝鮮における愛国婦人会

—韓国併合から満州事変開始まで—

広瀬玲子\*

## Aikokufujinkai in the colonial Korea

—from annexation of Korea to the beginning of Manchurian Incident—

Reiko HIROSE \*

## 要旨

本稿の目的は、植民地朝鮮における官製婦人団体である愛国婦人会について、1910年の韓国併合から1931年9月の満州事変開始までの活動を明らかにすることにある。植民地における愛国婦人会については台湾の研究があるが、1916年を挟んで「植民地戦争」への協力期から教化機構への転換を図ったと指摘される。しかし朝鮮においては、台湾と様相を異にしていた。結論を先取りするならば、朝鮮における愛国婦人会の活動は二つの側面を持っていた。すなわち第一には、第一次世界大戦・シベリア出兵などを支え、朝鮮内における3.1独立運動などを始めとする民族独立運動を鎮圧する軍隊・警察を支え、中国東北部やロシアと接する国境警備員を支えるという側面である。第二には、社会事業や救済事業を通じて「日鮮融和」を図り、朝鮮女性を「文明化」し組織するという側面である。愛国婦人会はこの二側面の活動を同時に展開した。本稿では第二の側面に焦点を当てる。具体的には、朝鮮婦人への機業技術の伝授、窮民救済、幼稚園の設立、消費節約・生活改善、妊産婦保護、乳幼児・児童愛護、災害救助などの多彩な活動を跡付ける。そのうえで、活動のなかでどのように朝鮮婦人との接点を作りだし、彼女らを啓蒙し組織しようとしたのかを見ていく。

## Abstract

The purpose of this study is to clarify the activities of Aikokufujinkai, a Japanese government-organized women's association in colonial Korea, from the annexation of Korea in 1910 to the beginning of the Manchurian Incident in September 1931. Research into the Taiwan branch of Aikokufujinkai points out that until 1916 the activities of Aikokufujinkai supported the Japanese army in World War I and then they changed into enlightenment. However, the situation in Korea was different from that in Taiwan in two aspects. First, they supported involvement in World War I, the dispatch of troops to Siberia, using the army and the police to

---

\* 北海道情報大学情報メディア学部教授, Professor, Faculty of Information Media, HIU

suppress the national independent movements; including the 3.1 independent movement, and the border patrol agents close to northeast China and Russia. Secondly, their purpose was to ‘civilize’ Korean women in order to establish a ‘harmonized relationship between Japan and Korea’ through social or relief activities. This study focused on the second aspect; specifically it traced the initiation of fabric technology, relief of the poor, the setting up of kindergartens, improvement of living, protection of pregnant women, and so on. The paper elucidates how Aikokufujinkai approached Korean women to enlighten them and to allow them membership in the organization.

## キーワード

女性の植民地責任(women’s responsibilities for colonial rule) 愛国婦人会朝鮮本部  
(Aikokufujinkai in colonial Korea) 社会事業(social activities) 日鮮融和(harmonized  
relationship between Japan and Korea)

### 1. はじめに

本稿の目的は、植民地朝鮮における官製婦人団体である愛国婦人会(以下、日本本土の愛国婦人会を愛婦または内地の愛婦、朝鮮の愛婦を朝鮮愛婦、台湾の愛婦を台湾愛婦とする)の、1910年の韓国併合から1931年9月満州事変開始までの活動を明らかにすることにある。愛婦が日本本土において、女流大陸進出論者奥村五百子の強力な働きかけと軍部の支援により、1901年に創立された女性軍事援護団体であることは周知の事実である<sup>1)</sup>。愛婦の組織化は日本本土にとどまらず、台湾に1904年、朝鮮に1906年に及んだ<sup>2)</sup>。朝鮮においては、日露戦争の遂行と

同時進行する、大韓帝国の植民地化と軌を一にして愛婦が誕生した。

朝鮮愛婦について、筆者はすでに別稿を發表している<sup>3)</sup>。植民地における愛婦誕生の背景には、植民地支配に女性植民者の力が必要とされたこと。とりわけ、「遅れた」朝鮮女性を文明化に導くものとして、日本女性の役割が期待されたこと(「文明化の使命」)。反面、武力で植民地民衆を抑圧する警察・軍隊を援護する存在が必要とされたことを明らかにした。さらに戦時下、大陸の兵站基地として位置づけられた朝鮮において、本土以上にすみやかな軍事援護活動を行うことが要請され、朝鮮愛婦は朝鮮婦人をも組織しながらそれにこたえたことを明

<sup>1)</sup> 愛婦についての研究は、千野陽一『近代日本婦人教育史』ドメス出版、1979年。同「解題 愛国・国防婦人運動展開の軌跡」(『愛国・国防婦人運動資料集』別冊、日本図書センター、1996年)。佐治恵美子「軍事援護と家庭婦人—初期愛国婦人会論—」(近代女性史研究会『わたしの近代』柏書房、1978年)。片野真佐子「初期愛国婦人会考—近代皇后像の形成によせて—」(『女の社会史 17-20世紀—「家」とジェンダーを考える』山川出版社、2001年)などがある。

<sup>2)</sup> 台湾愛婦については、洪郁如「日本の台湾統治と婦人団体—1904～1930年の愛国婦人会台湾支部に関する一試論—」(『立命館言語文化研究』10-5・6号、1999年)。同「『愛国婦人会台湾本部沿革史』解説」(『愛国婦人会台湾本部沿革史』下巻、ゆまに書房、2007年)がある。

る一試論—」(『立命館言語文化研究』10-5・6号、1999年)。同「『愛国婦人会台湾本部沿革史』解説」(『愛国婦人会台湾本部沿革史』下巻、ゆまに書房、2007年)がある。

<sup>3)</sup> 히로세 레이코「대한제국기 일본 애국부인회의 탄생」『여성과 역사』第13集、2010年12月。(大韓帝国における愛国婦人会の誕生 原文は韓国語)。広瀬玲子「植民地朝鮮における愛国婦人会—1930年代を中心に—」(『北海道情報大学紀要』第22巻第2号、2011年3月)。広瀬玲子「植民地支配とジェンダー—朝鮮における女性植民者—」(『ジェンダー史学』第10号、2014年)

らかにした。

これらのことは、愛婦といっても、内地において課せられた役割と、植民地において課せられた役割に、文脈上の相違が出てくることを示している。軍事援護活動が、植民地においては被支配民族への抑圧を支える暴力となるようにである。台湾愛婦の研究によれば、1904年の誕生から1916年までは、「植民地戦争」への協力期と指摘されている。台湾においては、被植民者を支配抑圧するための協力が愛婦に課せられたのである。かたや内地の愛婦は、日露戦争時の華々しい軍事援護活動が終息すると、「愛婦平和時不要論」に出くわすことになった。それでは朝鮮愛婦は韓国併合後どのような役割を求められたのだろうか。また朝鮮女性を含めた会員数は、どのように推移していったのだろうか。本稿ではその点を明らかにしたい。

扱う時期を併合の1910年から1931年9月満州事変開始までとしたのは、以下の理由に拠っている。朝鮮愛婦は併合による植民地化を歓迎し、朝鮮王室と緊密な関係を築き、上流婦人を入会させていった。植民地化に抵抗する義兵闘争は継続していたが、朝鮮総督府はそれを押さえ込む武断政治を行い、憲兵警察制度を施き、朝鮮駐劄軍を守備隊として110箇所に分散配置した(坂本2015, 徐2015)。

筆者はこの時期の朝鮮愛婦の活動は、植民地台湾と様相を異にしていると考え。洪郁如によれば、台湾愛婦は1916年を境に「植民地戦争」への協力から教化機構への転換を図ったとされる。しかし朝鮮愛婦は二つの側面を持っていた。第一には、第一次世界大戦への参戦・シベリア出兵などを支え、朝鮮内における3.1独立運動などを始めとする民族独立運動を鎮圧する軍隊・警察を支え、中国東北部やロシアと接する国境警備員を支えるという側面である。第二には、社会事業や救済事業を通じて「日鮮融和」

を図り、朝鮮女性を「文明化」し組織するという側面である。1910年から1931年9月の満州事変開始までの朝鮮愛婦はこの二側面の活動を同時に展開した。

本稿では第二の側面をとりあげる。具体的な活動を跡付け、活動のなかでどのように朝鮮婦人との接点を作りだし、彼女らを啓蒙し組織しようとしたのかを見ていく。また愛婦の活動を担った女性たちは、役割を遂行することにどのような意味を見出したのかについても、できる限り見ていくことにする。そこでは女性の「国民」化による地位向上という指摘が参考になると思われる(佐治1978)。

このように朝鮮愛婦の活動を明らかにすることで、植民地権力＝朝鮮総督府が在朝日本人女性に何を期待したか。それにこたえる形で、日本人女性が植民地支配をどのように担ったのかが具体的に見えてくるだろう。植民地支配に対する責任は女性にもあり、その固有性を明らかにすることが女性の植民地責任の一端を解明することにつながるだろう<sup>4)</sup>。

## 2. 日鮮婦人の親和啓発—機業伝習所

朝鮮愛婦は「日鮮婦人の親和啓発」に資する事項を励行しようと、1911年機業伝習所を設置した。具体的には鎮南浦委員部で「朝鮮婦人に産業を授けるために」行われた。総督府農商工部が機業器械10台を無料で提供し、愛婦朝鮮本部が150円の補助金を出した。三和商业会議所が建物を無償貸与し、沖田夫人一家が教師となった。このように官民有志の援助を受けた。伝習生となったのは朝鮮婦人17名である。一人当たり

<sup>4)</sup> ここで言う植民地責任とは、永原陽子「植民地責任」論とは何か(永原陽子編『植民地責任』論一脱植民地化の比較史』青木書店、2009年、pp.24-29)になっている。女性の植民地責任については、拙稿「女性の植民地支配責任を考える」(『北海道情報大学紀要』第20巻第2号、2009年3月)も参照されたい。

31 円 15 銭の経費がかかったが、一人につき毎月 3 円を補助した。伝習生は 6 月 10 日の開設から 9 月 9 日まで 3 ヶ月の期間伝習を受けた。修了までに白木綿 108 反・綿織 12 反、合計 120 反(伝習生一人につき 7 反強の作業割合)を織りあげた。修了式では修了とされた者 13 名。内 3 名は成績優秀により賞品を授与された。4 名は授業日数不足のため、引き続き第二回の伝習を受けることとなった<sup>5)</sup>。その様子は以下のように記されている。

伝習生一同は克く本所授業の趣旨を了得し孰れも専心一意業務に服し誠実勤勉克く教師の指導に従ひ課業を励みたり、此の風評を聞き来観する朝鮮婦人日々幾十を以て算するに至れり<sup>6)</sup>

伝習の様子がうわさとなり見学に来る朝鮮婦人が現れたことがわかる。

第二回伝習は 9 月 23 日から 12 月 23 日まで行われた。伝習生は前回修了生 4 名・未修了生 3 名に、新生 11 名を加えた 18 名だった。修了した者は 15 名。優等生 6 名に賞品を授与した。第一回・第二回の各修業生に対して、機業奨励の意味で機織器械購入を補助し、修了式当日に伝習生に交付した<sup>7)</sup>。この事業は以後再開されなかった。おそらく経済的負担が大きかったためと思われる。しかし併合直後に朝鮮女性との融和を図り、技術を広めて産業奨励を行おうとしたことは注目すべきであろう。「日鮮婦人の親和啓発」の初歩であった。

<sup>5)</sup> 「婦人会産業奨励」『毎日申報』1911.6.22。「鎮南部委員付属機業伝習所状況」『愛国婦人』第 241 号附録、1912 年 1 月 15 日。

<sup>6)</sup> 「鎮南部委員付属機業伝習所状況」『愛国婦人』第 239 号附録、1911 年 12 月 15 日。

<sup>7)</sup> 「朝鮮婦人の機業成績」『毎日申報』1911.9.20。「鎮南部委員付属機業伝習所第二回修業式」『愛国婦人』第 243 号附録、1912 年 2 月 15 日。

### 3. 趣旨の普及と宣伝—講話会・演芸会・幻燈活動写真会

朝鮮愛婦は、会の趣旨普及と宣伝、その結果としての会員拡大のために、講話・講演会や娯楽を前面に出した演芸会、幻燈活動写真会を開催した。

愛婦朝鮮本部は新渡戸稲造(1913.3.25)、志賀総督府医院長(1920.11.15「小児の栄養に就て」)の講演会を、井上円了(1918.5.26)、能仁大僧正(1920.2.18「国運発展上婦人の努力」)の講話会を行った。能仁大僧正の精神修養講話には 100 余名が参集した<sup>8)</sup>。

愛婦大邱委員部は演芸会を開催(1912.7.20)している。木浦委員部は「キネマの夕、慈善演芸会、敬老会、お伽会」を行っている<sup>9)</sup>。

なかでも最も盛んに行われたのが幻燈活動写真会だった。これは朝鮮愛婦創立時から行われていたが、持続している。光州支部は 1913 年「社会業務拡張活動写真会」を開催する。本部から大橋次郎主幹を呼び、5 月 22 日から 29 日まで管内を移動しながら各地で活動写真を上映した。朝鮮人向けには「産業勤儉に関するもの」を見せた。参集した観客は満足し、愛婦の会員となるもの「少なからず」と報じられている<sup>10)</sup>。全州支部も赤十字支部と一緒に、1916 年各府郡委員部に朝鮮本部員の出張を求めて、「社旨普及社員会員慰安」を目的とする活動写真会を行った。3 月 22 日から 4 月 3 日まで全州・益山・群山・扶安・金堤・井邑・錦山・茂朱を巡回した。「内鮮人共に参会者は夥多」であった。朝鮮人に対しては「特に通訳説明を行った」ので各地が非常に盛会であった<sup>11)</sup>。

朝鮮本部においても同様であった。春川郡・竹山郡の京城見学団一行を京城ホテルに招待、幻燈活動写真観覧会を行った(開催日は

<sup>8)</sup> 『毎日申報』の報道による。

<sup>9)</sup> 『木浦府史②』1930 年 12 月(『韓国地理風俗誌叢書』282)。

<sup>10)</sup> 「婦人地方大会」『毎日申報』1913.6.5。

<sup>11)</sup> 「赤愛活動写真会」『毎日申報』1916.4.14。

不明)。続いて1913年5月5日、鳳山郡観光団90余名を愛婦事務所に招いて、勸業殖産その他風景風俗に関する幻燈活動写真観覧会を行っている<sup>12)</sup>。

上映内容を見ると、産業勤儉や勸業殖産といった植民地経営に関連するものがあり、こうしたものを植民地在住の日本人と朝鮮人に見せることで、教化を図ろうとしたと推測される。他の娯楽的な内容のものと同映することで、多くの参集者を集めることができたのであろう。この時代、映像自体が希少価値を持つものであり、庶民にとっては興味をそそられるものであった。そこに着眼して在朝日本人や朝鮮人を教化し、会に対する支持を獲得するという狙いがあった。

#### 4. 窮民救済活動

朝鮮愛婦は窮民救済活動を行った。水害で被災した京城在住朝鮮人らに対し救恤金を贈っている<sup>13)</sup>。大邱支部は支部基金と役員積立金中の若干を支出して、大邱に住む「内鮮人貧民20余戸」を慰問し救済金を配給した<sup>14)</sup>。光州支部は神武天皇祭を期して各地の鰥夫(やもめ)・不具・孤独の貧民に金員を贈与している。その戸数は木浦府20戸100円、光州府22戸150円、求礼郡42戸102円、羅州郡47戸231円であった<sup>15)</sup>。同じく光州支部が旧正月を前にして面事務所で支部長・副長臨席のうえ、貧民47戸に対して一戸当たり「白米五升乃至一斗五升」を給与するとの報道がある<sup>16)</sup>。春川支部は1922年今年度の事業として「内鮮婦女子の融和を目的」とする、①孤児教育②産婦保護③幼児教養を行うことを決定した。孤児・貧児の教養に関しては地方篤志家に委託し、愛婦が養育費を支給して保育さ

せている<sup>17)</sup>。全州支部は旧暦歳末に「窮民70余名に粟米四石を分配した<sup>18)</sup>。大邱支部は他の3団体とともに、1927年1月23日～25日を「同情デー」として「社会鍋」を設置して一般通行人から同情金を集めた結果、現金817円4銭、白米8俵が集まった。これを使って旧正月初めに餅を作り、「朝鮮貧民総500戸」へ配布するとの報道がある。500戸の内訳は、東雲町50戸、新町150戸、南山町120戸、七星町80戸、徳山町鳳山町合せて100戸であった<sup>19)</sup>。この時の義金の剰余246円があり、翌1928年1月19日・20日に貧困な朝鮮人239戸を訪問し、白米3升を分与している<sup>20)</sup>。釜山では1927年12月22日が「餅の日」とされた。愛婦を含む婦人団体連絡会が主催して「慈善箱」を持ち、慈善寄付金を募集した。港棧橋の上陸客に対し呼びかけ、市内各所に婦人が立ち、電車内を回り、戸別訪問も行った。翌23日に道庁会議室で精算すると1500余円であったので、調査済みの「府内の哀れな同胞へ」餅・現金・品物を贈った<sup>21)</sup>。平壤支部は1930年平壤孤児院完成にあたり10円を寄付し、躄乞(歩くことができない傷害者)救済会へ5円を寄付している<sup>22)</sup>。

このほか注目されるのが日本赤十字社支部と提携した大邱支部の巡回無料施療である。この趣旨は、①赤十字社と愛婦の会の趣旨宣伝をはかること②医療の恩恵を施すと同時に衛生思想を普及することにおかれた。貧しい傷病者とりわけ朝鮮人にこのような施しを行うことによって、「文明化の使命」を果たし彼らを啓蒙しようとしたのである。実際には道立大邱医院に委嘱し、診療班を4つ組織して慶尚北道管内を9月から11月にかけて巡回

12) 「京城見学団招待」『毎日申報』1913.5.6。

13) 「愛婦本部水害救恤」『毎日申報』1915.7.29。

14) 「愛婦支部慰問」『毎日申報』1918.8.2。

15) 「愛国婦人会と救済」『東亜日報』1920.5.4。

16) 「愛婦救済」『毎日申報』1921.1.22。

17) 「愛国婦人会春川支部会議」『毎日申報』1922.2.24。  
『朝鮮社会事業要覧』1923年8月8日。

18) 「地方短評」『東亜日報』1925.1.27。

19) 「大邱貧民へ同情 日人愛国婦人会等が」『東亜日報』1927.1.29。

20) 「婦人団体が義金を贈与 露天に曝され」『朝鮮朝日』1928.1.21。

21) 『釜山』第2巻12月号、1927年。

22) 『中外日報』1930.5.3,5.4。

するという大規模なものだった<sup>23)</sup>。規模は小さくなったが1930年にも実施している。診療班4つで10月6日から11日まで漆谷・達城・金泉・水川・慶山・清道の各郡を巡回し「貧しき人々のために無料診療を」行った<sup>24)</sup>。

以上、貧しく生活が困難な朝鮮人を救済する活動を通じて朝鮮女性との接触を図り、彼女らに文明の恩恵を施すことで、「日鮮融和」を實踐して愛婦の趣旨を普及しようとしたのである。

## 5. 婦人と子どもの「日鮮融和」

朝鮮愛婦は婦人と子どもの「日鮮融和」を實踐しようとした。婦人に対しては、朝鮮総督府や『大阪朝日新聞』社が講演会や茶話会を積極的に企画し、愛婦はそれを支える側に回った。

子どもに対しては、日本人と朝鮮人が同じ空間で集う幼稚園を設立した。

### 5-1 お伽家庭講演会と婦人会の設立

日本の植民地支配を揺るがせた3.1独立運動の余波が覚めやらぬ1919年5月、大阪朝日新聞社は「お伽家庭講演会」を開始し、朝鮮各地を巡回した。児童向けには午後の時間帯に各地の小学校でお伽講演会を、婦人向けには夜に小学校・公会堂・寺院などで家庭講演会を行った。講演者は大阪朝日記者村上寛と京城通信部の井上収であり、時には学校長らが特別講演をすることもあった。家庭講演会では「家庭改造」が叫ばれた。井上は、「国家の基礎は家庭にあり国民の基礎は夫婦にあり」と、「国家国民の改良進歩発達の為め」家庭改良の必要を説いた。村上は「婦人の自覚、各家庭の改良を述べ更に母の力の偉大なるを」力説した。大阪朝日新聞社がこのよう

な講演会を始めた狙いは、「現代の婦人一殊に植民地婦人一」が「一時の安逸を偷みて俗悪なる娯楽などに耽る」という状況を憂い、女子の覚醒」を促すことにあった<sup>25)</sup>。

先立つ1914年には、愛国婦人会員の服装の華美が「中流以下の多数婦人」の参加を遠ざけているのではないかという批判がなされていた<sup>26)</sup>。また1915年に京城を訪れた東京女学校長の棚橋絢子は、京城の女性たちの服装が「頗る華美」であると指摘し、虚栄・奢侈的欲望を遠ざける精神修養を主張していた。特に「朝鮮婦人に対する我婦人の行動」を以下のように批判している。

中には此の弱者の地位にある朝鮮婦人を兎角疎外し、軽侮するの傾きあるは、誠に痛嘆に堪へぬ次第で、(中略)今後は温顔誠意を以て之に接し、奢侈華美の風姿を避けて質素儉約を旨とせる事を示して、大に其同化に努むる事に、十分の注意を致して貰ひたい<sup>27)</sup>

在朝日本婦人が朝鮮の婦人を同化・指導しようとするならば、質素儉約を旨として彼女らの手本とならなければならないというのであった。

すでに植民地朝鮮へも「新しい女」の主張は流入し、その影響を受けた「新女性」も出現していた(井上 2014)。婦人をとりまく思想が流動化する時代が始まっていたのである。そこに起こった独立運動は、家族の要としての婦人の覚醒を要請することになった。

朝鮮女性からも「生活改善」「家庭改造」が叫ばれ多くの言論がなされた。彼女らは、封建的家族関係の否定・家庭内での女性の地位向上・衣食住の改良・封建的生活習慣からの脱却等を主張したが(井上 2014)、『大阪朝日』

<sup>23)</sup> 「大邱愛国婦人会巡回無料施療」『毎日申報』1928.6.30。「愛婦と赤十字巡回診療を各地に派遣」『朝鮮朝日』1928.7.1。

<sup>24)</sup> 「赤十字無料診療」『朝鮮朝日』1930.10.7。

<sup>25)</sup> 「お伽家庭講演会 鎮南浦に於ける大盛況」『朝鮮朝日』1920.5.18。「新婦人団の創立 感激に満ちて」『朝鮮朝日』1920.6.10。

<sup>26)</sup> 紅嶺女史「京城の婦人界」『朝鮮公論』第2巻第3号、1914年3月。

<sup>27)</sup> 棚橋絢子「在鮮の我婦人に対する希望 昨秋渡鮮中に感じた一事」『朝鮮公論』第4巻第2号、1916年2月。

や総督府・愛婦が推進した「日鮮融和」と交わることはなかった。

講演会の狙いは在朝日本婦人にとどまらず朝鮮婦人を組織することにあつた。1920年にはまず日本婦人の動きが起こる。釜山・大邱・京城・平壤・大田・群山各地で、「散在分立しつつある婦人団体をして一丸となし植民地に於ける婦人の廓清と団結力の鞏固を期すべく」、婦人会設立の動きが始まっている。平壤では愛婦と仏教婦人会が中心となっていた<sup>28)</sup>。

京城ではハミリーホテルで6月15日に準備会が開かれた。参加者は日本人のみであったが、「婦人団体の社会事業に就て」「各家庭改造の急務」「婦人覚醒」「内鮮人融和について内地婦人の注意すべき」事柄が話し合われた。この様子は家庭改造文化運動として、「日鮮融和の新しい道を開くことも出来、家庭改造、社会改造の意義ある結果も見らるゝであろう」と報じられた<sup>29)</sup>。京城連合婦人大会は6月20日に日の出小学校大講堂で開かれ、700余名が参加した。発起人総代京口さだ子(朝鮮愛婦の重鎮)は挨拶の中で、各々の会が個性を発揮し発展させ、成果をもちより団結の力で婦人の覚醒・家庭の改造を図ろうと呼びかけた。日の出小教師麻柄とよ子は、欧米から来る危険思想に対抗し健全なる思想を養おうと説いた。村上寛は、参政権問題・経済独立問題に騒ぐ者があれども、婦人の任務は家庭にありと強調した<sup>30)</sup>。

7月4日には釜山婦人会発会式が1000名の参加で、群山婦人会発会式が150名の参加で行われた。ここでも「婦人の道は母職をつく

す」ことが強調された<sup>31)</sup>。

他方、1921年12月18日には、朝鮮総督府政務統監部の肝入りで、愛婦朝鮮本部主催の内鮮女教員招待茶話会が開かれた。招待された朝鮮人学校は京城・進明・淑明・梨花・同徳の各女子高等普通学校。日本人学校は各高等女学校・技芸学校・京城幼稚園・康子幼稚園であり、9校から54名が参加した。うち朝鮮人教員は10名であった。愛婦からは水野万寿子本部長・赤池副長・常務委員・相談役(男子)・大橋次郎主幹が参加し、全体で80名であった<sup>32)</sup>。

こうした会を行うことで朝鮮婦人のリーダー層と接点を作り、日本の植民地支配に同意を調達しようと試みたのである。朝鮮女性の知識階級の中で、層が厚いのは女性教員であった。総督府はこのような方法で「日鮮融和」の試みを行ったのである。それは被支配民族である朝鮮婦人のリーダー層にとって、植民地での地位向上・国民化への道が開けることを意味した。

1922年京城連合婦人大会第二回大会を前に、7月8日京城各婦人会代表者会議が開かれた。各会婦人が参席したが、朝鮮愛婦関係者としては愛婦代表として佐々木春尾が、その他京城女教員第四部代表者として鈴木はる・京口さだ子が参席している。朝鮮人女子青年会代表は、「止むを得ざる用件ができたので欠席」した<sup>33)</sup>。朝鮮婦人の組織化はスムーズには行かない様子が見える。

7月15日に第二回大会が開催された。総会では連合会代表者京口さだ子が報告を行った。その後井上収の講演・ピアノ演奏・厨川白村の講演・バイオリン演奏と続いた。「参集の内鮮婦人引きも切らず」盛会だった<sup>34)</sup>。少しづ

28) 「意義ある婦人会設立 家庭講演を機として」『朝鮮朝日』1920.5.18。「新婦人団の創立 感激に満ちて」『朝鮮朝日』1920.6.10。

29) 「連合婦人会設立に基く打合せの茶話会 京城各派婦人代表者集る」『朝鮮朝日』1920.6.18。「京城婦人界の黎明—婦人社会奉仕の第一声目覚めた人々の創造」『朝鮮朝日』1920.6.20。

30) 「京城連合婦人大会網羅せる知識階級渾然融合す 意義ある活動期して待つべし」『朝鮮朝日』1920.6.24。

31) 「釜山初めての会合 自治の氣に満ちた花の会=婦人会発会式」『朝鮮朝日』1920.7.8。

32) 「彙報」『朝鮮』第83号、1922年1月。

33) 「婦人連合会打合せ総会開催決定」『朝鮮朝日』1922.7.13。

34) 「雨を侵して内鮮婦人が来集した京城婦人会連合会」『朝鮮朝日』1922.7.18。



つ朝鮮婦人の参加が始まったようである。学務局長夫人の柴田いよ子は、「朝鮮婦人も色々な会合に見えるようになりまして」「確に一進歩でせう」と語っている<sup>35)</sup>。従来の慣習で、内に閉じこもる朝鮮婦人を家の外に引き出すには相当の作戦が必要だった。

同じ時期大阪朝日新聞社は、内地において全関西婦人連合会を開催している。この会に関しては石月静恵の研究があるが、地域女性運動の集大成として革新的な主張も散見される(石月 1996)。しかし植民地朝鮮においては同様な主張は見られず、「新しい女」や自立を志向する女性を否定し、保守的な女性像を定着させようとする主張に終始していた。

## 5-2 愛国婦人会京城幼稚園の設立

愛婦朝鮮本部は、日本人幼児と朝鮮人幼児が同じ空間で集う愛国婦人会京城幼稚園を開設する。1922年5月1日のことであった。この開園には、当時の朝鮮本部長水野万寿子の意向が大きく働いていた。水野は「明治町の愛婦幼稚園といふものを拵へた産みの親」とされている<sup>36)</sup>。園長が水野万寿子、主任保母は鈴木はる子だった。開設当時の様子は以下のように報じられていた。

是は斯うした子供の時から日鮮同化の必要を深く自然的に子供の頭に染込ませようといふ企てゞ其成績も非常によい方あります、其の他に至りましては愛国婦人等が日鮮婦人を抱擁して婦人会覚醒の為に種々尽力されて居ります<sup>37)</sup>

ここにも述べられているように、愛婦朝鮮本部は婦人の「日鮮融和」とともに、子どもの「日鮮同化」を推進しようとしたのである。開園と同時に内鮮幼児110名(定員120名)の保育を開始した。1923年4月に第一回卒園児

48名を出し、在園幼児数は136名だった<sup>38)</sup>。翌1924年3月には第二回卒園児65名を出し、在園幼児数は140名だった。開設以来設備費及所要経費は2万168円89銭とある<sup>39)</sup>。ともかく順調に滑り出していることがわかる。「幼き芽生の内から内鮮融和を吹き込む」とも報じられていた<sup>40)</sup>。

若いそして美しい朝鮮の保母先生が優しく打つピアノのキーさへも天真の子供の国に一つ一つ楽譜の姿と化つて今にも踊りだしそうに。(中略)五歳から七歳までの朝鮮のいたいけな幼児が純粹の日本語で日本人幼児と童謡を唄ひ且つ踊る姿は真に内鮮融合のシンボルである<sup>41)</sup>

1925年5月11日には大正天皇・皇后の銀婚式を祝う京城府内各幼稚園の連合運動会が開かれ、内鮮幼児600名が参加した。水野の後を継いだ愛婦朝鮮本部長下岡松子が愛婦幼稚園調製の奉祝徽章500個を参加幼児に寄贈した<sup>42)</sup>。15日の新聞は達磨落しの写真を載せた。

1929年10月には新しい園舎を完成させている。1937年3月時点で卒園内地幼児879名・朝鮮幼児465名を数えている<sup>43)</sup>。幼稚園保母を勤めた麻柄トヨ子は、日本幼児が2/3朝鮮人が1/3の割合だったと述べている<sup>44)</sup>。幼児を通じた日本人と朝鮮人の接触も生まれる。こうした交流によって「日鮮融和」を図ろうとしたのである。

38) 『朝鮮社会事業要覧』1923年8月。

39) 『朝鮮社会事業要覧』1924年10月。

40) 「芽生時代の愛婦幼稚園」『朝鮮朝日』1924.4.6。

41) 「内鮮を結ぶ一つの施設 子供の国は一途に楽し愛国婦人会の開く愛の幼稚園のこと」『朝鮮朝日』1925.3.25。

42) 「子供の国幼稚園の連合運動会 祝福の一日」『朝鮮朝日』1925.5.13。なお『朝鮮朝日』は1925年4月1日より『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日』と改題しているがここでは『朝鮮朝日』で通す。

43) 愛国婦人会朝鮮本部『愛国婦人会朝鮮本部事業大要』1937年10月30日。

44) 『朝鮮社会事業』第19巻8号、1941年8月。

35) 「朝鮮婦人会も目覚しき進歩です 柴田学務局長夫人談」『朝鮮朝日』1922.8.9。

36) 井上収「連載第1回朝鮮政務総監物語」『京城ローカル』1940年春季号。

37) 前傾「朝鮮婦人会も目覚しき進歩です 柴田学務局長夫人談」。

## 6. 生活改善・消費節約

1920年代になると行政主導による消費節約・生活改善の動きが出てくる。1922年9月28日に咸鏡北道庁から府尹・各群守へ消費節約の宣伝を行うように通達があった。特に家庭婦人に対して、消費経済に関する知識訓練を行うことが急務とされていた。宣伝要目は①一般②学校方面③官庁・銀行・会社諸事務所④愛国婦人会及地方婦人会という4方面に対して指示がなされた。④を詳しく見ると5点が指示されている。消費経済勤儉貯蓄の講話・講習会を開催すること。衣服や調度品は実用に徹し流行を追わないこと。化粧は抑えること。家庭副業講習会を開催すること。消費節約勤儉貯蓄の標語及び俗謡の懸賞募集を行うことであった<sup>45)</sup>。

1923年11月25日に愛婦鳳山委員部は役員会を開き、生活改善に着手する方針を決定した。①年明けの名刺交換会は手作りの名刺を使い服装は質素に。②1月7日手芸品展覧会を開催する。「自作自給」が目的なので編物・洋服・刺繍・袋物・染色品を出品すること。会員その他有志婦人に働きかけるが、役員は一人二点を義務とする。その場で販売も行う。出品物が優秀な者には褒賞を与える。③生活改善研究会を設立し月1回例会を開く。これらの活動を通して会員増募をおこなう<sup>46)</sup>。このようなかたちで婦人の役割を明示化した。

1924年咸興支部は咸鏡南道社会課と合同で、生活改善講習会を開催している。管内各地を会場として250円の予算で行った。講習科目は家庭衛生・編物・割烹・染色・洗濯等となっている。生活の合理化による生活改善が目的とされている。

全州支部では1929年9月26日に一般会員たちが会合して、生活改善の実行事項を協定した。項目は多岐に渡っている。時間励行/規律正しく/訪問は事前に連絡し食事時は避け

る/普通訪問客には茶菓のみ/訪問時間は午後1時から3時の間/来客への食事のもてなしはしない/年末年始の贈答廃止/紋服必要時は愛婦服で代用/予算生活家計簿作成/金は有功に使う/実用品は共同購入で/買い物は現金で/二次会絶対廃止/児童の貯蓄心奨励/早起励行/衛生遂行。一般会員が知恵をしぼって方針を決めていく様子が目に見えるようである<sup>47)</sup>。このように委員部が活発に動き出していた。

1929年11月2日、総督府は各道知事宛に緊縮節約の通牒を発した。4大項目として朝鮮人の色服奨励/婦人の化粧制限/外上買い廃止/事務所に午餐携帯を指示した。また①一般②学校方面③官庁会社④婦人会と4方面に対して指示を飛ばした。④は4点が指示されている。消費経済勤儉貯蓄の講話・講習会を開催する。衣服その他の用品は実用を主とする。化粧品の制限。消費節約勤儉貯蓄を行うであった<sup>48)</sup>。この内容を見ると、1922年に出されたものと酷似している。しかし1929年10月には世界恐慌が起こっていることから、消費節約・生活改善はいっそう重要性・緊急性を帯びておりその実行は焦眉の急であった。

この通牒に先立つ8月、浜口雄幸内閣の生活改善・公私経済緊縮の方針を受けて、釜山においては学務係主催で社会教化懇談会が開催された。生活改善の趣旨宣伝及実践窮行が議題となった。協議事項には「生活改善につき特に婦人団体の理解と婦人の家庭やに於ける実行につとむる様努力せしむるの件」が挙がっていた<sup>49)</sup>。

生活改善・消費節約の主導者・実行者は女性であり、総督府は婦人団体である愛婦やその他の婦人団体の自発性を引き出し、利用した。婦人にとっては指示に呼応して植民地支

45) 「消費節約と宣伝」『毎日申報』1922.11.13。

46) 「鳳山愛国婦人会」『毎日申報』1923.12.2。

47) 「全州愛国婦人会 生活改善実行方針協定」『毎日申報』1929.10.2。愛婦服とは具体的にどんなものか不明であるが、略式羽織のようなものだったと推測する。

48) 「二千万民衆へ緊縮節約を呼号 四大項目の実行方法を指示 総督府通牒發送」『毎日申報』1929.11.3。

49) M.S「社会教化懇談会」『釜山』第4巻第8号、1929年8月。

配に加担することで、自身の役割を価値化し国民化への道が開かれていくことを意味した。

## 7. 妊産婦保護・乳幼児保護・児童愛護

### 7-1 妊産婦保護事業の開始

妊産婦保護事業を最初に開始したのは春川支部である。1912年設立された支部は、当初から妊産婦保護事業を行った。「昨年中保護を加へたる妊産婦4名あり」との記録がある<sup>50)</sup>。続いて愛婦朝鮮本部も産院設置に動き出した。8万円の工費をかけ、竹添町赤十字社診療所構内に、赤十字付属病床44台・愛婦産院の病床22台を新築する計画である。ターゲットは、従来の産院は妊産婦の取扱いに多分の欠陥があり、これを避けて開業医に行けば診療費が高いため受診し得ないという「中産以下の妊産婦」であった。「入院料は中産以下の家庭を標準として普通患者と共に成るべく安く懇切丁寧を主として診療に当たる」。付帯事業として「児童保護の意味で、哺乳児保育上の育児相談にも応ずる」幼児健康相談所も開所するというものだった<sup>51)</sup>。この計画は順調に進み、1924年10月1日から朝鮮本部の産院・幼児健康相談所を開所した<sup>52)</sup>。この相談所の事業は、後述する乳幼児保護・児童愛護事業の一環として開設される、乳幼児健康相談所・児童健康相談所へと引き継がれていく。

内地では妊産婦保護事業を1921年岡山支部が開始したが、その後の出足は遅かった(飛鋪 1941)。また台湾では満州事変開始後の1932年から開始された(大橋 1941)。朝鮮で早くからこうした事業が必要とされたのは、朝鮮人乳幼児死亡率の高さからであった。1926年から30年のそれは、当時の後進国水準の1000人当たり200人の水準を割り込むこと

ができなかった(辛 2007)。この死亡率の軽減が喫緊の課題ととらえられた。朝鮮人乳児・児童は将来の人的資源であり、そのためには乳幼児死亡率の減少を目指す必要があった。愛婦はその政策の一端を担ったのである。

### 7-2 乳幼児保護・児童愛護事業

続いて乳幼児保護・児童愛護事業として開始されたのが、「児童愛護デー」の取り組みである。内地においては1927年から開始されたが、朝鮮においては学務局主導のもと1928年から開始される。5月5日を「児童愛護デー」と定め、京城では京城府教育会・社会事業研究会が主催し、援助団体として総督府・京畿道社会課・朝鮮教育会・京畿道教育会・愛国婦人会・赤十字社・朝鮮児童協会・宗教関係婦人の会が協力した。趣旨は、①乳児死亡率の低減運動②親が子に対する義務の鼓吹奨励③大人が児童の人格を尊重して対等の待遇をするやうにとの覚醒運動とされた。「健やかに育てよ国の宝」「正しく強く育てよ家の宝」などの標語を印刷した小旗5万本、5万枚のチラシ、1万枚のポスターを作製し配布。胸につける標語入りの造花を各婦人団体が販売し、収益で孤児院・育児院児童のために茶・菓子・弁当を贈る。商店は飾り窓に標語を掲げ、ラジオは児童向けの音楽・童謡・童話を放送、「子供の躰け方」「児童衛生について」などの講話も流している。夜には龍山小・寿松普通学校で活動写真の映写会を行った。愛婦は公会堂で乳幼児愛護大会を開いた。また赤十字病院などと足並みをそろえて本部内に乳幼児健康相談所を設けた<sup>53)</sup>。こうした舞台を整えて華々しく「児童愛護デー」を演出したのである。

釜山においても、釜山府主催釜山コドモ協会後援で5月5日から6日に行われた。ポス

50) 「愛婦春川支部」『朝鮮社会事業要覧』朝鮮総督府 1923年8月8日。

51) 「愛国婦人会朝鮮本部の産院設置」『朝鮮社会事業』第13号 1924年5月。

52) 飛鋪秀一『愛国婦人会40年史』愛国婦人会 1941年 p.369。

53) 「学務局では5月5日を児童愛護」『東亜日報』1928.4.25。「愛せよ敬せよ国の宝の子供をと標語入りの旗や造花で賑はった児童愛護デー」『朝鮮朝日』1928.5.8。「児童愛護デー 朝鮮では今年から始めて実施」『京城彙報』第80号 1928年5月。

ター1000枚、チラシ1万枚を配布し、児童商品の1割引(5/4-6)を行い、各学校ではお伽会・父兄懇談会を行い、さらに講演会・母性愛高唱の映画の会、子供のための映画と童話会など盛大に取り組まれている<sup>54)</sup>。

翌年から愛婦朝鮮本部は主催7団体の一つとなった。京城においては昨年以上に盛大な取り組みが行われた<sup>55)</sup>。ラジオによる講演放送、児童口腔無料診療、妊産婦健康相談、乳幼児並児童無料健康相談所が開設された。乳幼児並児童無料健康相談所の実績は、愛婦を含む5箇所、相談者は内地人63名、朝鮮人225名、計288名だった。講演会は朝鮮児童協会童心社主催で行われた。活動写真野外映写会は5日から9日にかけて、府庁前・パゴダ公園・小学校2箇所・普通学校3箇所で行われ、各1500名から3000名を集めた。「至る所に於て非常なる歓迎を受け予期以上の盛況を以て終始」した。

またこれ以後「児童愛護デー」は京城・釜山以外の各地でも取り組まれるようになった。確認できるものは、馬山・新義州・清津・咸興・大邱である。

愛婦朝鮮本部は乳幼児健康相談所を本部幼稚園内に設けた。乳幼児健康相談所は他に赤十字病院内(常設)と鉄道病院内(週間中開設)があったが、幼稚園内の相談所も週間中開設とした。「主として乳のみ子の取扱方母乳の飲ませ方離乳の仕方と乳離れ時の食物其他栄養品の用ひ方」について相談に応じた。5月から6月までの相談件数は、内地人86名朝鮮人91名計177名であった<sup>56)</sup>。

翌30年5月1日には、赤十字社朝鮮本部病院内に愛婦朝鮮本部児童健康相談所を設立して、毎週火曜日に相談業務を行った。

1931年からは乳幼児愛護週間として5月5日をはさむ1週間の催しとなった<sup>57)</sup>。「強く正しく愛らしく」の標語を掲げ、京城の街中に巨大な宣伝塔がいくつも立てられた。新たに加わった行事として、ラジオでの朝鮮語放送、児童の寄生虫無料検査、乳幼児審査会、母の会及講話会がある。

乳幼児審査会は、愛婦朝鮮本部と韓鎭達財団乳幼児相談所の両者が主催し、優良児童に賞品を授与した。乳幼児健康相談の実績は、内地人312名、朝鮮人294名、計606名。乳幼児審査会の応募は、内地人112名、朝鮮人107名、計219名。表彰児数は、内地人48名、朝鮮人17名、計65名であった。母の会は8箇所、講話会は15箇所で開催された。

大邱では5月7日に週間最大の行事として乳幼児愛護懇談会を行った。婦人有志・医師・産婆・教育家・社会事業家等100余名が出席した。婦人が妊婦及び産婦としての体験談や意見を述べ、産婦人科医や産婆と意見交換を、乳幼児保育についての体験談や意見を述べ、小児科医との意見交換を、家庭での訓育についての幼稚園や学校からの希望を聞いた<sup>58)</sup>。

妊産婦の保護や乳幼児の健康という問題は、国家にとってと同様に婦人に密接な関心事である。この関心から朝鮮婦人を含む多くの婦人を催しに参加させ、乳幼児の健康を保持・増進する。朝鮮婦人との接点を作り乳幼児健康相談を通じて彼女らを導き、延いては朝鮮の統治や愛婦への支持をも獲得することが総督府の狙いであった。愛婦はその旗振り役を務めたわけであるが、そのことは婦人の役割を自覚し植民地支配に貢献するという道を開く。愛婦会員にとっては国民化の道が開けることを意味していた。

54) 「児童愛護デー」『釜山』第3巻第5号1928年5月

55) 『愛せよ敬せよ育てよ』の標語をふりかざし児童愛護の宣伝を行ふ めっぽう死亡率の高い朝鮮の児童』『朝鮮朝日』1929.4.21。「乳幼児並児童愛護日」『京城彙報』第92号1929年5月。

56) 「乳幼児健康相談所成績」『京城彙報』第94号1929年7月。

57) 「京城府外9団体主催乳幼児愛護週間 5月5日から11日まで各種の実施事項」『毎日申報』1931.5.2。「乳幼児愛護週間」『京城彙報』第116号1931年5月。「第5回全国乳幼児愛護週間実施成績」『京城彙報』第117号1931年6月。

58) 「乳幼児愛護懇談会大邱で開催」『朝鮮朝日』1931.5.8。

## 8. 災害救助活動

朝鮮愛婦は災害罹災者への救助を行った。時々起る水害や旱害に対してである。

まず水害罹災者救助から見ていく。1923年8月は大同江が氾濫し、洪水が朝鮮北西部を襲った。『朝鮮朝日』8月8日は「西鮮一帯に互る洪水被害惨状言語に絶す 平壤及び其下流甚し」と報じ、翌9日には「港町付近の鮮人家屋倒壊」「大同江鉄橋の避難民」「南門町付近の浸水」という3点の写真を載せている。この被害を救助するため愛婦会員が炊き出しに動員されている<sup>59)</sup>。咸興支部は9月末日までの期限内で、一口10銭以上の義捐金を募集した<sup>60)</sup>。新義州支部は1924年1月20日、家屋流出倒壊者及び死亡者遺族等65名の罹災民を宣川郡庁へ呼び、磯野相談役が慰問の辞を述べた後、現金1円77銭ずつを交付した<sup>61)</sup>。また楊西・楊下両面の罹災民1083戸に対して慰問金2000円を送付し、1月23日楊下面長を通じて一戸当たり1円77銭ずつ分給している<sup>62)</sup>。

もちろん愛婦朝鮮本部がすべての会員有志によびかけ義捐金を取りまとめている。合計21000余円を集め、平安北道へ9100円、平安南道へ7110円、黄海道へ4000円を送っている(愛婦朝鮮本部 1941)。

1925年7月12日には漢江が氾濫し甚大な被害をもたらした(京城府 1925, 有賀 1925)。被災者への診療を開始した赤十字に続いて、愛婦朝鮮本部は7月20日に臨時評議員会を招集し、下岡松子本部長以下役員列席のうえ、溺死者の弔慰と罹災者の慰問について協議した。各地愛婦はこれに呼応した。平壤支部は

野菜300貫とパン3000人分を本部に届けた<sup>63)</sup>。朝鮮本部全体としては義捐金6450円、衣類1238点、浴衣地100反、食パン4100人分を送呈した(愛婦朝鮮本部 1941)。この水害には内地本部からも義捐金が寄せられた。会長下田歌子が200円、茨城支部長次田静子が200円を送っている(有賀 1925)。

1928年8月には咸鏡南北道を水害が襲う。朝鮮本部は咸南知事宛に2000円を、咸北支部長へ500円を寄贈し、さらに水害義捐金募集の広告を掲載する。金額は30銭以上1円以内、締切りを9月30日として募集を開始した<sup>64)</sup>。11月13日には義捐金8265円を罹災民に送った(愛婦朝鮮本部 1941)。

次に旱害窮民への救助である。1924年夏は全羅北道を旱害が襲った。総督府を始めとする救済活動に呼応して、愛婦全州支部と赤十字社は義捐金品を募集し、集った4260円で1925年陰暦年末(正月前)に第1回目の救助(慰問)を行った。さらに義捐金品を継続募集し申込み額が2万1千余円に達した<sup>65)</sup>。

1928年8月には京畿道・黄海道・慶尚北道・忠清南道・全羅北道を旱害が襲う。愛婦大邱支部では大邱婦人会・仏教婦人会と一緒に街頭に立ち道行く人々から義捐金を集めた<sup>66)</sup>。

このように水害・旱害といった自然災害罹災者に対して救済活動を行ったほか、突発的な事故被害者救済活動も行っている。1930年3月10日の陸軍記念日に、鎮海海軍要港部演武場で開催された祝賀行事の最中、ガス爆発が起り演武場に火が廻り消失、小学児童104名が焼死、4名が重傷を負った。総督府はただちに弔慰金募集に着手する。愛婦朝鮮本部は朝鮮教育会・朝鮮内各新聞社とともに主催者となり、締切りを4月30日とする弔慰金募集を開始した。清津支部・大邱支部が諸団体と

59) 藤原喜蔵「失敗の回顧」和田八千穂・藤原喜蔵編『朝鮮の回顧』近澤書店1945年、p.396。

60) 愛国婦人の活動 四鮮水害救済に『毎日申報』1923.9.3。「水災慰問金 愛婦支部で募集」『毎日申報』1923.9.9。

61) 「愛婦災民慰問」『東亜日報』1924.1.14, 1.25。

62) 「赤十字と愛国婦人会の同情」『東亜日報』1924.1.28。

63) 『京城彙報』第44号1925年8月。

64) 『朝鮮社会事業』第6巻第9号1928年9月。

65) 「全北の窮民救済状況」『毎日申報』1925.4.1。

66) 「慶北旱害民救済既に1万5千円募集 各婦人団体連合活動2千余円募集」『毎日申報』1929.4.9。

協力し募集を開始している<sup>67)</sup>。京城では募集を5月29日でひとまず締切り、総額63165円21銭を集めた。協議の結果すべて慶尚南道知事へ一任することになっている<sup>68)</sup>。

以上のような救済活動を行うことで、罹災朝鮮人との接触も生まれたであろう。たとえ上からの恩賜的な対応であったとしても、朝鮮人の植民地支配への反感・反発を和らげることにつながったのではないだろうか。朝鮮婦人の中には入会者も現れたのではないだろうか。また愛婦の会員女性はこうした救済活動を行うことで、自らの存在意義を見出すことになったと思われる。

## 9. 総会開催と会員の増加

併合から満州事変開始までの間に、朝鮮本部は4回の総会を開いた。第2回(1911.5.27)、第3回(1915.10.2)、第4回(1921.10.5)、第5回(1929.10.3)である。総会を機として会員を拡大していった。会員勧誘の様子を明らかにし、また朝鮮人会員をどのように獲得していたのかを見ていく。

### 9-1 第2回総会

第2回総会を前にした愛婦の様子を、『婦女新聞』は以下のように伝えている。

今や会員六千数百名五月下旬、寺内総督の帰京を待ちて、盛大なる総会を開くまでには、一万人以上に至らんとす。吾人は如何にして朝鮮婦人を勧誘し、我所謂愛国婦人会の主義目的を会得せしめんか、そが苦心計営を紹介するところあるべし<sup>69)</sup>

朝鮮に於ける愛国婦人会員には、内地人の外に朝鮮婦人なかなか多数なり。(中略)聞く、朝鮮婦人が会員となりて最も愉快

を感ずるは、貴婦人と席を同じくすることなり、容易に参観し得る事能はざる事物を参観するの栄を担ふことなり、胸間に輝く徽章なり云々と。亦何ぞ戦士の遺族を労ふべき事情問題あらんや。今や新附の我姉妹なり、漸次其目的を会得せしむることに勉めんか、有力なる同会の一団として、有力なる活動の一助とならん。真に有望と謂ふべし<sup>70)</sup>

愛婦朝鮮本部が総会をめざして一万会員を獲得しようとしていることは、『毎日申報』4月20日も報じていた。在朝日本婦人ならともかく、朝鮮婦人を会員として勧誘する場合には、国に殉じた戦士の労を労うという愛婦本来の軍事援護の趣旨だけでは難しい。朝鮮婦人にとってそれはいまだ他人事であった。そこで先の引用中にあるように、入会者が享受できる特典が必要だった。朝鮮に愛婦を作るときにいち早く韓国王室を取り込んだように、高官夫人が勧誘の対象とされた。『毎日申報』5月20日は、総会に向けた準備の過程で日鮮婦人の篤志者が新たに賛同入会し、軍司令部及び京城衛戍病院の将校夫人が入会したと報じた。総会前に愛婦が公表した「要項」中には、「日鮮婦人間の親和啓発会務拡張に関する事項を実行する」という項目が盛り込まれていた。朝鮮婦人の上流層から勧誘しようとしたのである。

総会参加者には特典が与えられた。地方からの参加者には、鉄道局が汽車賃3割引証を配布して各支部委員部へ発送した<sup>71)</sup>。その他の特典として、①本部調製の記念品②徽章③昌徳宮仁政殿・秘苑等の拝観券④山口・丸一両呉服店其他京城の重要店舗の割引券を配布した。ただし参列は「質素な服装で」と指示した<sup>72)</sup>。

総会は昌徳宮秘苑内の咲花堂で開催された。

67) 『朝鮮朝日』1930.3.11-14,3.16。

68) 『朝鮮朝日』1930.5.31。

69) 「朝鮮愛国婦人会」『婦女新聞』573号1911年5月12日。

70) 京城支局一記者「朝鮮愛国婦人会(つづき)」『婦女新聞』575号1911年5月26日。

71) 「愛婦総会次第」『毎日申報』1911.5.24。

72) 「愛国婦人会彙報」『毎日申報』1911.5.26。

会場に大天幕を張り、彩色レースを縦横に綾取った舞台が整えられた。寺内正毅朝鮮総督、李王妃以下来賓 100 余名、会員 600 余名が出席した。愛婦総裁閑院宮載仁妃智恵子の諭旨朗読、奉答文朗読、会長阿部篤子の祝辞が読みあげられたのち、李王妃は「本会は国家公共事業に対し其の資する所尠からず尚将来に於ても此処に住する内地及び朝鮮の婦人に於て互に相提携し以て斯業をして益益発展せしむるに努力せられんことを望む」と述べた。続いて寺内総督は、「平素より其の分に応じ正淑の気風を養成して会員外の人々にも推し及ぼし又勤儉の美風を興し其の資を以て国家有事の資に宛てしむるの覚悟をなさん事を望む」と述べた<sup>73)</sup>。寺内の祝辞は朝鮮人会員のために朝鮮語に訳されて伝えられた。日本婦人と朝鮮婦人の提携親和、正淑の気風・勤儉の美風を広め朝鮮の文明化に寄与することを奨励したのである。総会の写真を見ると、日本婦人の参加者に加えて、韓服をまとった朝鮮婦人も参列している<sup>74)</sup>。

総会終了後には数々の余興が催された。①日鮮軍楽隊の奏楽②少女らの手踊③綱渡曲芸④陸軍軍楽隊及滑稽仮装の舞踏⑤10余ヵ所の模擬店である。こうした催しが参会者の目当てでもあった。総会翌日には参会者 500 余名が昌徳宮秘苑・動植物園・博物館を拝観。翌々日には景福宮を拝観した<sup>75)</sup>。

『毎日申報』6月9日によると、この第2回総会に際して、京城と龍山の新入会者は546名に及んだ。また総会后に会勢拡大に尽力した功績に対して功労表彰があった。朝鮮本部副長の石塚忍子・大屋敦子は二等有功賞(金150円以上を寄付、または300名以上の入会員を直接紹介した者、またはそれに準ずる功労者)を、6名の朝鮮高官夫人と2名の日本婦人は三等有功賞(金50円以上の寄付、また

は150名以上の入会員を直接紹介した者、またはそれに準ずる功労者)を贈与された<sup>76)</sup>。第2回総会に向けた取り組みで会員数は増加した。1910年末会員数は6464名(内地人5941、朝鮮人523)だったが、1911年末には7674名(内地人6938、朝鮮人736)となった。さらに1912年2月13日には、李王妃が長年会務拡張に尽力したことが認められ、宮内庁より名誉会員に允許された<sup>77)</sup>。

## 9-2 地方支部の成立・拡大と第3回総会

この総会后続々と地方支部・委員部が誕生し、総会を開催する。確認できるものは新義州委員部(1911.6.11 第2回総会)、平壤支部(1911.6.18 第2回総会)、羅南委員部(1911.9.24 第2回総会)、木浦委員部(1911.10.8 第2回総会)、光州支部(1911.10.11 発会式)、鎮南浦委員部(1911.10.22 第3回総会)、鏡城支部(1911.12.3 第1回総会)、大田委員部(1911.12.17 発会式)、清州支部(1912.5.23 臨時総会)、咸興支部(1912.6.16 第1回総会)、春川支部(1912.6.23 第1回総会)、晋州支部(1913.6.5 第1回総会)、京城支部(1913.10.13 設置)、公州支部(1913.10.17 第1回総会)、海州支部(1913.11.1 臨時総会)、大邱支部(1913.11.16 第1回総会)、全州支部(1914.11.26 第1回総会)である。このように雨後の筍の如く愛婦は朝鮮各地に広まった。官製婦人団体にふさわしく行政主導で会を立ち上げたのである。

そして1915年10月2日に第3回総会を迎えることになる。総会に向けての会員勧誘は7月頃から行われている。愛婦役員が先頭に立ち入会者が多数出ているとの報道がある<sup>78)</sup>。また「朝鮮上中二流婦人の入会人員が不少」と報じられた<sup>79)</sup>。第3回総会は赤十字社総会と合同で行われた。内地本部から閑院宮載

73) 「第二回会員総会」『愛国婦人』第227号附録1911年6月15日。川俣馨一『愛国婦人会史』愛国婦人会史発行所1912年pp.334-337。

74) 『愛国婦人』第229号1911年7月15日。

75) 「愛婦会員の観覧」『毎日申報』1911.5.31。

76) 『愛国婦人』第231号1911年8月15日。

77) 「李王妃名誉会員」『毎日申報』1912.3.1。

78) 「赤愛勧誘好況」『毎日申報』1915.7.25。

79) 「赤十字社愛国婦人会総会」『毎日申報』1915.10.2。

仁・同妃智恵子が参席し、参集者は会員 3500 余名、遺族・廃兵 50 余名だった(愛婦朝鮮本部 1941 飛鋪 1941)。この総会や各支部総会に向けて会員増募を行った結果、新入会員は 4070 名(内地朝鮮人 2188)だった<sup>80)</sup>。1914 年末会員数は 9932 名(内地人 8438, 朝鮮人 1494)だったが、1915 年末には 14065 名(内地人 11100, 朝鮮人 2965)と増加した。朝鮮婦人の入会が増えていることがわかる。

### 9-3 第 4 回総会における会員倍加

第 4 回総会を迎えるにあたり、会長の下田歌子が来鮮することになり、向う 3 ヶ年の間に 1 万 5 千人の新会員を募集することになった。会員増募は支部・委員部単位で数字が割当てられた。平安北道の割当ては 669 人となり、平壤支部長の道知事夫人が各方面に勧誘状を発送した<sup>81)</sup>。開城委員部では副面長 2 名の勧誘で、入会者が 200 名に達した<sup>82)</sup>。他の支部・委員部も同様な会員募集をおこなったと推測する。

下田の来鮮と朝鮮巡回日程は、10/3-18 京城 10/9 仁川、10/11-12 安東・新義州、10/14-15 大邱、10/15-16 釜山であった<sup>83)</sup>。下田の巡回に合わせて総会を開催した支部もあった。

1921 年 10 月 5 日開催の第 4 回総会には、会長下田歌子、李王並びに王妃も参席した。参会者は 3000 人、1000 人は朝鮮婦人であった。斎藤実総督は、「啻に救護事業に止まらず内鮮婦人相提携して社会強化等の為施設すべき事業亦益多きを加へんとす」との祝辞を寄せた。李王妃は、「内地婦人朝鮮婦人相携へ相輔けて其の事業の発展に努められむことを望む」と日本語で祝詞を述べた。総会では朝鮮本部長水野萬寿子より会員が倍加したとの報告がなされている。水野は「今後益々会運著しく躍進すると共に、本会の主旨も亦汎く難

林各道を徹底し、内鮮婦人融和同化の上にも一段の効果と致すべきを信ず」と述べた<sup>84)</sup>。朝鮮人会員のために諭旨・祝詞を朝鮮語に訳して奉読した(飛鋪 1941)。会員増募会務拡張に功績があったとして 368 名が各種有功章を授与された<sup>85)</sup>。1920 年末の会員数は 15674 名(内地人 12382, 朝鮮人 3292)だったが、21 年末には、30288(内地人 20384, 朝鮮人 9904)と増加している。まさに一大運動を繰り広げ会員を倍加させた。

### 9-4 第 5 回総会

1929 年 10 月 3 日に開催された第 5 回総会にも、会長本野久子・理事鳩山春子・評議員天野多喜子・事務総長柿沼竹雄が内地から来鮮し参席した。参会者は 1 万名を超えた。会務拡張の功績から有功章が 170 余名に授与された(飛鋪 1941)。1928 年末の会員数は 36160 名(内地人 24511, 朝鮮人 11649)だったが、1929 年末には 45073 名(内地人 30628, 朝鮮人 14445)となった。朝鮮愛婦は総会を節目として会員を増やしていったのである。

順調な会員増加の要因は、行政指導による会員獲得もあったであろうが、すでに述べてきたように、種々の幅広い活動によって種がまかれたことによると考える。会の趣旨を普及宣伝する催し、窮民・罹災民救助、妊産婦の保護・乳幼児愛護、女性と子供の「日鮮融和」などの多彩な活動が、朝鮮婦人との接点を作り勧誘・入会の機会となった。目に見える活動の実績があったからこそ会員増募が可能になったのである。

## 10. おわりに

以上、韓国併合から満洲事変開始までの朝鮮愛婦の活動を見てきた。実に多彩な活動を繰り広げたといえる。日露戦争後に「愛婦平

80) 「愛婦会の成績」『毎日申報』1916.1.9。

81) 「婦人会の活動」『大阪朝日』1921.9.6。

82) 「愛国婦人会員増募」『毎日申報』1921.9.26。

83) 「下田歌子女史朝鮮巡回日程」『大阪朝日』1921.9.11。

84) 「彙報」『朝鮮』朝鮮総督府、第 81 号、1921 年 11 月。

85) 「愛国婦人会有功章授与」『大阪朝日』1921.10.11。



和時不要論」に直面した内地の愛婦は、活動の方向を社会事業活動に転換した。台湾愛婦も 1916 年以降は社会教化機構へと転換を図った。本稿で述べた朝鮮愛婦の活動もまた社会事業的側面の活動であった。

植民地支配を開始したばかりの朝鮮においては、愛婦会員の獲得はそうそう順調には進まなかった。なぜなら台湾愛婦の場合、1915 年時点の会員は台湾婦人が圧倒的に多数を占めている(大橋 1941)。しかし朝鮮愛婦では前述のように日本婦人が多数を占めていた。朝鮮王族・貴族(両班)夫人などを取り込んだとしても、それはまだまだ少数であった。このことは、日本の植民地支配に対する反感・反発が大きかったことと無関係ではあるまい。

しかし植民地支配は女性の力・役割を不可欠とする。総督府は朝鮮女性の植民地支配への同意を引き出そうとして、朝鮮女性の「文明化」を誘引し、「親和啓発」「日鮮融和」の指導的役割を果たすことを日本女性の任務とした。その役割を課せられたのが朝鮮愛婦であったといえる。朝鮮婦人との接点を作り、彼女らの生活の向上に寄与し、延いては会員を獲得する。そのような目的でこれまで述べた社会事業活動は展開され、会員獲得という点で一定の成果を挙げたが、台湾と比較すれば朝鮮婦人会員はいまだ少数派にとどまったというのが満州事変勃発前の状況であった。

朝鮮愛婦の会員である日本婦人にとっては上からの指示によったとはいえ、多彩な活動を担うことで、自己の役割を自覚し価値化し存在意義を確認することができる。自発性を喚起され積極的な活動を行う会員も出現する。これが国民化への回路を開いたといえることができる。

この時期の朝鮮愛婦の活動のもうひとつの側面である、第一次世界大戦への参戦・シベリア出兵などを支え、朝鮮内における 3.1 独立運動などを始めとする民族独立運動を鎮圧する軍隊・警察を支え、中国東北部やロシアと接する国境警備員を支えるという側面を明

らかにし、両面から朝鮮愛婦の活動を総合的に評価することを次の課題としたい。

#### 参考文献

- [1] 愛国婦人会朝鮮本部(1941)『愛国婦人会朝鮮本部概要』, p.61, p.63, p.65。
- [2] 有賀信一郎(1925)『漢江水害誌』漢江水害誌編纂所, p.250。
- [3] 井上和枝(2013)『植民地朝鮮の新女性—「民族的賢母良妻」と「自己」のはざま—』明石書店, pp.117-132。
- [4] 石月静恵(1996)『戦間期の女性運動』東方出版, pp.43-89。
- [5] 大橋捨三郎(1941)『愛国婦人会台湾本部沿革史』愛国婦人会台湾本部, p.116, pp.508-509。
- [6] 京城府(1925)『大正乙丑の水災』近澤書店, p.143。
- [7] 坂本悠一(2015)「植民地支配の最前線としての帝国軍隊」同編『地域の中の軍隊 7 帝国支配の最前線』吉川弘文館, p.29。
- [8] 佐治恵美子(1978)「軍事援護と家庭婦人—初期愛国婦人会論—」近代女性史研究会『女たちの近代』柏書房 pp.118-128。
- [9] 辛圭煥(2007)「20 世紀前半, 京城と北京における衛生・医療制度の形成と衛生統計」『歴史学研究』NO.834, p.20。
- [10] 徐民教(2015)「韓国駐劄軍の形成から朝鮮軍へ—常設師団の誕生」坂本悠一編『地域の中の軍隊 7 帝国支配の最前線』吉川弘文館, p.173。
- [11] 飛鋪秀一(1941)『愛国婦人会 40 年史』愛国婦人会, p.300, p.331, pp. 356-357, pp.369-370。

#### 謝辞

本稿は平成 25 年度～28 年度 JSPS (C) 課題番号 25370787 「女性の植民地責任に関する研究—朝鮮を中心に」および、平成 25 年度～28 年度 JSPS (A) 課題番号 25244030 「帝国日本の移動と動員」の研究成果の一部である。